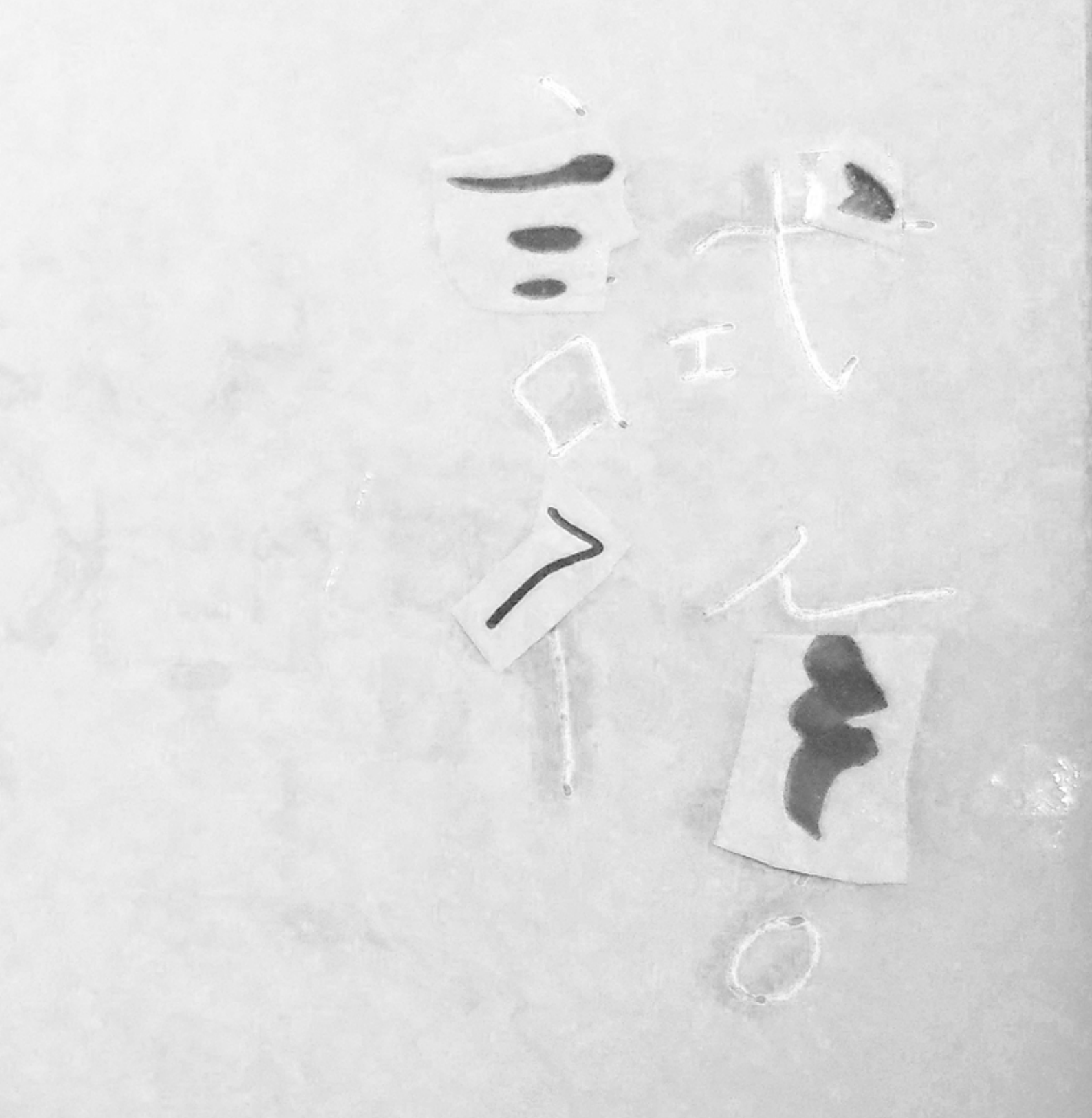


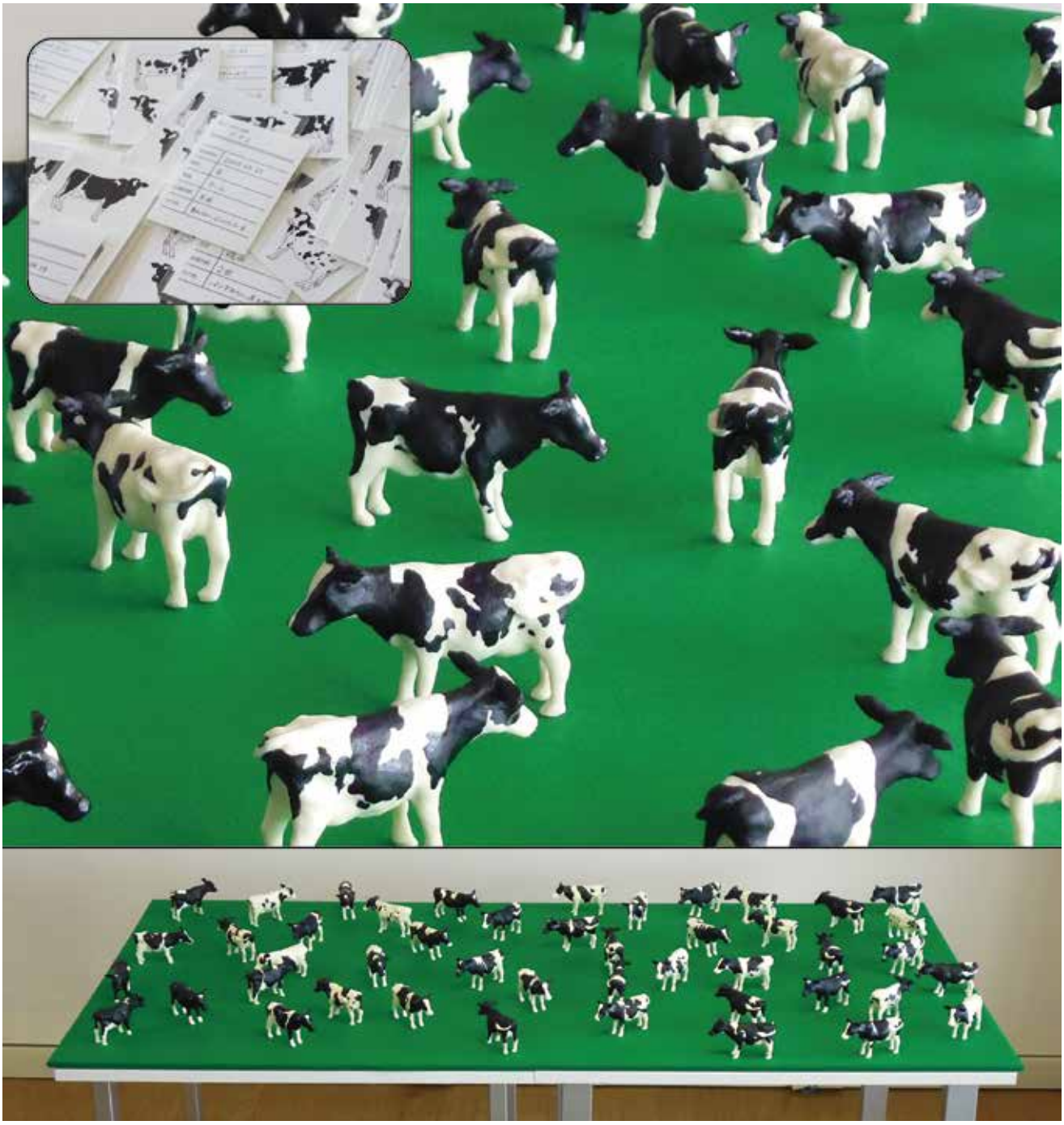
東海大学国際文化学部
デザイン文化学科
2015年度卒業研究 作品紹介集

Graphic

Architecture

Product

Planning



個体識別番号のない牛たち

白黒模様にみる春木牧場の乳牛46頭（2015年のある日）

私の実家は酪農家で、昔から家畜である乳牛は身近なものだったが、改めて父に話を聞くと、知らないことがたくさんあることが分かった。そのひとつが、本来20年ほど生きられる牛を、人間が6〜7年という短いサイクルでコントロールしているという事実である。現在、乳牛は個体識別番号で管理されている。ビジネスを行う上で、その方が都合が良いからだ。しかし、家畜というより友だち感覚で接していた私にとっては「牛乳を生産する動物」以前に、乳牛たちはかけがえのない命であった。1頭1頭の違いをより多くの人に感じてもらうために、斑紋（白黒模様）がすべて異なる46頭のフィギュアを制作した。乳牛たちの生まれ持った個性を感じて欲しい。

春木 野愛
Haruki Noai
笹川研究室

2015年度卒業研究 優秀賞
（苫小牧南高等学校）

デザインの新しい学びと旅立ち

デザイン文化学科は、2012 年に東海大学札幌キャンパスの最も新しい学科の一つとして設立されました。そして、この2016年3月に第1期生を送り出します。本卒業研究作品展は、４年間の学びを経て社会の入口に立つ学生が、その学びの成果を結集し、各々の自由な発想を生かしながら取り組んだ卒業研究を御紹介するものです。

デザイン文化学科では、「デザインがわかる」、「デザインができる」、「デザインを生かす」、という理念のもと、デザイン系科目と企画構想系科目の組合せによる新しいデザイン教育を進めてきました。グラフィック／メディア／製品／建築・インテリアといったデザインの専門力を磨くと共に、ファシリテーション／プロジェクトマネジメント／アイディア発想法といった授業によりデザインを社会の様々なシーンで生かすトレーニングを重ねてきました。

いま日本の社会は、硬直化した制度、様々なアンバランス、社会インフラの劣化など多くの困難を抱えています。また、情報の伝達共有の仕組みの変化は世界のあり方も揺るがしています。そうした社会にあって、課題を自らリサーチし、与条件を解釈し直して再構成し、斬新なアイディアと表現によって新たな可能性を拓くデザインの役割は、未来を拓く貴重な力の源泉となることでしょう。

またデザイン文化学科生は、フィールドワークや授業外でのイベント等で幅広く活躍し、チームワークの良さとコラボレーション力を培ってきました。展示されている卒業研究作品は個人個人の創意と努力によるものですが、本展の企画と運営にはそうした力が生かされています。一人一人の展示パネルに記された様々な着眼点、そして各作品に込められた未来への想いを感じとって頂けますと有難く思います。

東海大学デザイン文化学科では、北海道の豊かな自然と札幌の先進性を生かしながら、国際化に対応する新たなデザインと価値の創造に向けてさらに歩みを進めてまいります。今後とも、多くの方々の御支援と協力を賜ることができますようお願い申し上げます。

東海大学 国際文化学部
デザイン文化学科

発行日　2016 年 3 月 31 日
制作者　東海大学国際文化学部デザイン文化学科
〒005-8601 札幌市南区南沢５条1丁目1－1
tel 011-571-5111
url www.u-tokai.ac.jp/about/campus/sapporo/
http://blog.goo.ne.jp/tokai-hokkaido/
https://www.facebook.com/TokaiUniversitySapporo.Official/

ぬりえアクセサリー

ぬりえの持つ魅力と可能性

山下 美咲
Yamashita misaki
笹川研究室

（北見柏陽高等学校）

子どもが成長するとともにその存在を忘れられてしまう「ぬりえ」だが、最近では多くの大人が楽しむなど、様々な変化の兆しが現れている。私は「ぬりえ」にはまだまだたくさんの魅力や可能性があると考え「ぬりえアクセサリー」を制作した。塗って終わりにするのではなく、作品をアクセサリーとして簡単に持ち出すことができる。アクセサリーは５種類（バレッタ、ブローチ、ピアス／イヤリング、ブレスレット、ネックレス）で、それぞれ３種類の図柄とおまけの図柄がある。自分の好みや気分によって色合いや塗り方を変えて楽しむことができる。「ぬりえ」の持つ癒しやぬくもりという魅力を、身につけることによってより身近に感じてもらいたい。

出版不況における女性ファッション雑誌の活性化

企画とレイアウトの提案

鹿嶋 亜紗未
Kashima Asami
小川研究室

（札幌稲北高等学校）

出版不況といわれる現代において、雑誌の売り上げ衰退は著しい。むしろ出版不況は雑誌不況といっても過言ではない程の落ち込みである。そこで、その雑誌不況のなかでも女性ファッション雑誌（20 代向け）に視点を置き、紙媒体であるからこその雑誌の魅力を再発見し、活性化を図ることを研究テーマとした。そこで提案したのは、雑誌の企画とレイアウトの制作である。実際に制作したのは、20代の女性をターゲットとした女性ファッション雑誌で、サイズB5)は近頃発行される雑誌の種類が増えてきているコンパクト版を参考にした。内容は表紙、裏表紙、他6ページレイアウトは、流行を意識しシンプルなものでターゲットの世代に受け入れやすいものにした。

浮遊

ロトスコープ映像の制作

西村 佳菜子
Nishimura Kanako
早川研究室

北海道イラストレーターズクラブα
優秀学生賞
（帯広北高等学校）

ロトスコープとはモデルの動きをカメラで撮影し、それをトレースしてアニメーションにする手法です。私は卒業作品としてその手法を利用したミュージック映像の制作に挑みました。この手法を取り入れた理由はリアルな動作と、絵の具の独特の滲みによる科学反応への期待からです。2 分弱の映像で使用した絵は約 1000 枚程度です。制作の手順として実写映像を撮影した後パソコンに取り込み、静止画を書き出してから印刷、トレース台を使用して水彩絵の具で作画しました。それからスキャナーを使用してパソコンに再度取り込み動画編集ソフトで編集作業を行いました。曲もオリジナルで、映像に合わせ友人の協力のもと完成しました。

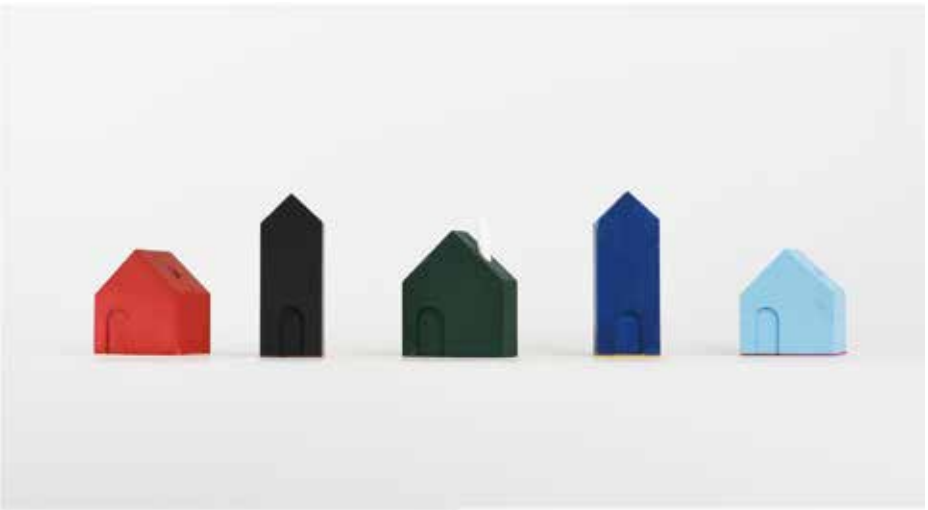
もじずかん

子供に日本の文字の魅力を伝える

伊藤 聡珠
Ito Satomi
早川研究室

日本グラフィックデザイナー協会
北海道地域 優秀学生賞
（札幌東商業高等学校）

子どもに文字の魅力を伝えるため、ひらがなだけの図鑑を製作した。文字に関しての知育書籍は多数あるが、ひらがなに特化したものは少数であったからだ。既存の本との違いをよりはっきりさせるため、1.「大きな文字」2.「たくさんのフォント」3.「体験型の本」の3つのポイントを意識した。「体感型」を実現するために5つの項目に分類した。「見る」「知る」「作る」「言う」「書く」の項目ごとにページを構成している。また、実際の図鑑では紙質の強度や厚み、書きやすさ、持ち運び易さを考えサイズ感等を子ども向けに研究した。対象年齢は2歳〜6歳くらいまでとし、保護者の方と一緒に楽しんでもらう本になっている。



黒板塗料を使った商品開発

暮らしを少し豊かにするものづくり

上田 優葵
Ueda Yuki
中尾研究室

（札幌手稲高等学校）

黒板には懐かしい風合い、チョークの独特な書き心地、そしてかき消しが楽という３つの魅力がある。だが、現在黒板の生産はホワイトボードの約半分にまで減少している。そこで、黒板をもっと身近に感じられるものを作りたいと思いこのメッセージハウスを作った。メッセージハウスとは小さな伝言板のようなものである。置くだけでも暖かい雰囲気が出て、家族皆の使う姿が思い描けるよう家の形をしている。帰りが遅くなる人へのメッセージ、母の日や記念日に普段は言いにくい感謝の気持ちを伝えるときなど家族間のやりとりに使ってほしい。テーブルの上で使えるコンパクトなサイズ感で、底に当てたフェルトがテーブルに傷や汚れがつくのを防いでいる。

乳幼児から使用できるダイニングチェアの製作

高さ調整ができ永く使える椅子の提案

遠藤 齊
Endo Hitoshi
中尾研究室

（東海大学付属翔洋高等学校）

私は、乳幼児から大人まで使用できるダイニングチェアの製作を行った。子ども用のハイチェアはいくつかあるが、子どもから大人まで使用できるものは少ない。また、使用できたとしても座り心地がよくないので、大人になってからは使われないことが多い。そこで私は、大人も使えるハイチェアではなく、子どもも使えるダイニングチェアを製作した。子どもができれば、子ども用の座面やベビーガードを付け、ハイチェアとして使用できる。そうすることで、家族で同じ椅子を使い、同じ食卓を囲むことができる。また、側面は三角構造で丈夫にして永く使えるようにした。

[Size] W:525 D:500 H:770
[使用年齢] 生後６ヶ月ごろから
[材料] ブナ、革

ストレッチチェア

腰痛持ちの人が長時間座っていられる椅子

渡辺 省吾
Watanabe Shogo
中尾研究室

（東海大学付属仰星高等学校）

腰痛持ちの人が長時間座っていられるデスクワーク向けの椅子を制作。人は座るときに無意識に疲労を感じているのです。椅子に座って楽に感じるのは足が楽なだけであって体は疲労を感じているのです。そこで一番疲労を感じない姿勢が正座の姿勢だといわれています。私はそこに着目し、椅子の脚をロッキングにして前に傾けると自然に正座の姿勢になるようにした。それを実現させるために正確なロッキングの角度や、前に倒した時にお尻が滑らないように座面のお尻があたる部分に穴を開け、その穴に坐骨結節点がひっかかるようにした。背もたれも疲れた時に腰が伸ばせるように角度をつけ、ハンプを使用した。中にはウレタンを二層いれ腰にフィットし圧迫させない作りにした。

クロスカントリースキー競技をより快適に

複数のスキー板をまとめて運ぶための道具の製作

石川 潤
Ishikawa Jun
笹川研究室

（旭川大学高等学校）

クロスカントリースキー競技では、合宿や遠征の際、一人の選手が 10 台ほどのスキー板を宿泊所に持ちこむ。そして、当日の天候や種目に合わせて 3,4 台のスキー板を選んで練習場に持って移動することになるのだが、バラバラのスキー板は両手を塞いでしまう。そこで、複数のスキー板をまとめて運ぶことができる道具があれば、選手のストレスが軽減されるのではないかと考えた。実際に製作したものは、スキーセット同士がバラつくことを抑えるための U 字型の部品と、それぞれのパーツをしっかりと固定し、肩に担ぐためのバンドでできている。小さな問題解決かも知れないが、競技により集中できることで競技成績の向上につながると考えている。

Small Forest

小さな森をもつ幼稚園。
いのちを学び、育む。

中川巧巳
Nakagawa Takumi
藤森研究室

（札幌新川高等学校）

日本では、20 代若者の死因の約 50%が「自殺」である。その原因の 1 つとして、SNS が発達したことで直接話す機会を失いコミュニケーション能力が低下してしまったことが挙げられる。また現代のこどもたちは大人たちの時代と比べて「自然の環境で安全に遊ぶことが出来なくなった」といわれている。本計画では人間形成の基礎が培われる極めて重要な時期となる「幼児期の生活環境」の改善を目標に幼稚園を提案した。コンセプトは「命」と「自然環境」である。幼稚園の敷地内に小規模の動物園と植物園を設け、様々な生命と過ごし「育てる」ことで「命の大切さ」「自然の豊かさ」を学び、育む。また、敷地内には小さな森を設けることで、安全にのびのびと走り回ることができる環境を創出した。

人が集まる建築

大都市に負けない商業施設

安藝 龍星
Aki Ryusei
藤森研究室

商業施設技術団体連合会
会長賞
（東海大学付属第五高等学校）

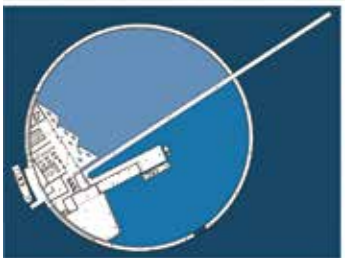
これは、福岡県北九州市小倉の商業施設の計画です。計画地は、JR 小倉駅に面する恵まれた立地条件ですが、既存の商業施設は開口部が少なく市民の賑わいやアクティビティが感じられません。そこで本計画では小倉が再び活気ある町として再生することを目指し、新たな施設を計画しました。提案する建築は円形プランが特徴です。表裏のない円という形のため、様々な方向からアクセスできることになります。中央には円形の広場を設け、市民が 24 時間利用できるパブリックスペースとしました。夏には「山笠」という北九州で行われる祭りの舞台となり、冬にはイルミネーション・ツリーが輝き、季節に応じたイベントが行われます。

North Mixture Pier

稚内港に提案する建築空間

佐藤 駿永
Sato Syun-ei
藤森研究室

（稚内高等学校）



これは、私が 18 年間生まれ育った北海道稚内市にて市民と観光客をターゲットとした計画です。稚内市の人口は減少の一途をたどり、街は衰退へ向かっています。稚内市が日本最北端にあるという位置的価値以上の魅力を引き出すために①マチと港を繋ぐ②港とヒトを繋ぐ③体験による記憶のスーベニアショップという 3 点の目標を掲げました。提案では北防波堤ドームのある埠頭の先端から 60m に及ぶ桟橋が円形の界壁に伸びています。強化ガラスによるダブルスキンの界壁の内部には緩やかなスロープが巡り海や街並を眺めることができます。界壁の内側には海上テラス、飲食店、ギャラリー、船着き場、釣り具店といった施設があります。これらがヒトと港と街の触媒になることを意図しました。

都心居住区再生計画

須貝 瑛未
Sugai Eimi
大野研究室

（札幌新川高等学校）

計画する集合住宅の敷地は札幌市の西に位置する円山地区とする。都心に近いながらも、自然が豊かで、子どもから高齢者まで幅広い年代の人々が暮らしている。計画地区画内に残されてきた歴史的な痕跡に敬意を払い、これからの将来にも残すことのできる提案とする。地上は地域の公共財産として、全ての人のために解放する。そして空中は、個人と住民の共用空間として、みんなを繋ぐ。また山から続くように豊かな緑を持ち、光と風が建築を突き抜けて広がる。この建築は 4 枚の床が柱で支えられ、階段が繋ぐ。床の間には自由な配列で箱（個人の住戸）が並び、そこに隙間が生まれ住む人や土地の個性と馴染み、この場所だからこその暮らしが豊かに築かれる。

人の心を動かす イラストレーション

イラストにより、それは可能か

花崎 浩美
Hanasaki Hiromi
石塚研究室

（おといねっぷ美術工芸高等学校）

絵を描くときには、自分の内側に目を向けるようにしている。すると、いろいろなものが見えてくる。その中には面白いものから、目を背けたくなるようなものまである。目を背けたくなるもの？私は思った。他人の欠点というものは自分の中にも存在するのではないかと。例えば自分に欠点がある場合、それを見たくないという心が生じる。ということは、その要素が他人にもある場合、それに対して喜びが生じるだろうか。嫌悪が生じることだってあるのではないだろうか。他人はみんな自分だ。区別をしてはいけない。今回、制作しながらそう感じた。学生生活の集大成として、この画集を制作できて嬉しい。これを新たなスタートとして、頑張りたい。

３次元コンピューターグラフィックスにおける照明計画

吉田 大生
Yoshida Hiroki
小川研究室

（東海大学付属望星高等学校）

デザインの世界において照明は極めて重要な役割を持ちます。正しく設置された照明は物の正確な形を照らし出し、色の見え方や感じ方、雰囲気などを演出する事が可能です。照明の違いによって人の感じ方は大きく変化してしまいます。近年では技術の発達により 3 次元コンピュータグラフィックス (3DCG) を使って画像や映像を作ることが増えています。低コストで何度もやり直しの効く 3DCG 制作は今後ますます増えて行くでしょう。しかし、3DCG について学ぶ場合、ライティングについて深く説明されることはありません。そこで 3DCG におけるライティング技術について調べ、実際にシーンをライティングして画像を制作、そのワークフローをまとめました。

空間全体を包む光（スピルライト）としてドームライトを設置し、全体を青暗く染め上げ、夜の空間を作り出す。

間接照明を置いて明るさを調整し、見せたい部分（壁の凹凸やプールのタイリング）を際立たせるライトを当てる。

室内照明を設置する。空間の雰囲気を壊さないようにライト強度を弱めに設定し明るくなり過ぎないよう注意した。

SAPPORO PROJECT SCENE

取材による札幌市内のプロジェクトのリサーチ

赤坂 文音
Akasaka Ayane
笹川研究室

北海道デザイン協議会
優秀学生賞
（帯広北高等学校）

今後のプロジェクト運営に役立てることを目的として、札幌で活動している４つのプロジェクト（PMF の渡辺史子さん他３名）についてチーム単位でリサーチを行い、冊子としてまとめた。組織の仕組み・運営のコツ・抱えている問題などを引き出すために、「広報」「運営体制」「継続させていく秘訣」の３点を取材時における重点項目とした。現在、特に札幌市ではプロジェクト同士が共有できる情報が少ない。公開できる範囲で実施までのプロセスやノウハウなどを共有することができれば、分野を問うことなく有益な情報になると考えている。私自身が今後プロジェクトに関わっていく中で、今回の取材で得られた経験を活かしていきたいと思う。

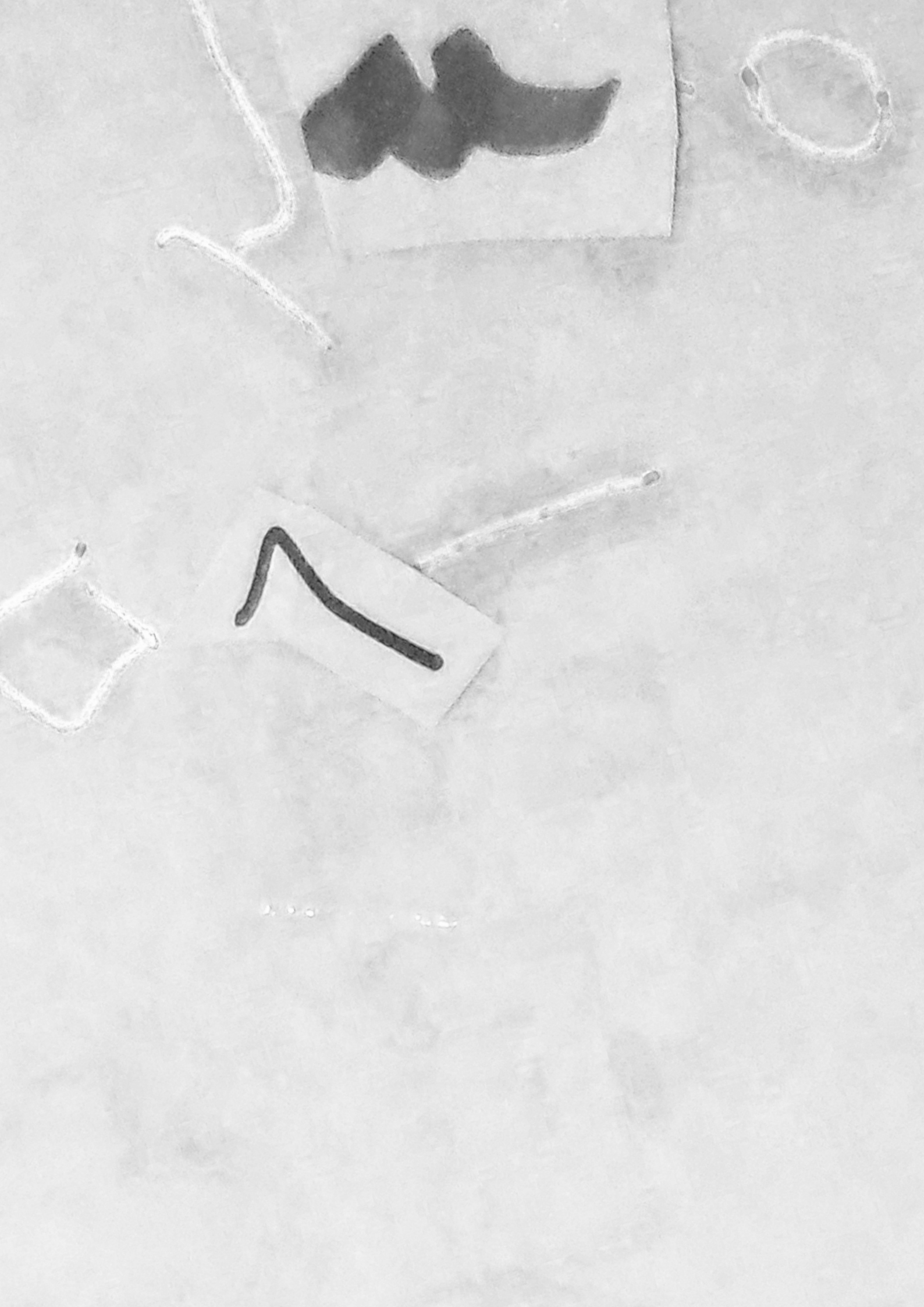
[PASIFIC MUSIC FESTIVAL] 2015 年 10 月 8 日　渡辺史子さん

[さっぽろオータムフェスト 2015] 2015 年 10 月 19 日　佐藤夢真さん

大人女子に向けたカプセルトイ

思わず回してしまいたくなるカプセルトイの提案と制作

青木 梨菜
Aoki Rina
伊藤研究室

（札幌国際情報高等学校）

「ガシャポン」「ガチャ」などと呼ばれるカプセルトイは、子どものころに何度も回した記憶がある人が多いだろう。以前は子ども向けの玩具が中心だったが、ここ数年は大人がハマる商品が増えているのだ。大人になってもガチャガチャを回したい、欲しいという大人女子に向けたカプセルトイの提案、制作を私は行った。大人の女子が見た瞬間に思わずクスッと笑えて、「かわいい」「癒される」と思え、SNS につい写真を撮って載せたくなるようなカプセルトイを目標に、お寿司のネタが動物になっていて、動物達がゆったりのんびりシャリの上に乗っかっていて、見ていて癒されるカプセルトイを制作した。